

## 江戸時代の『源氏物語』享受と絵双六

\* ◇内の数字は資料番号

平安時代に成立した『源氏物語』は、およそ600年後の江戸時代に入ると、公家を中心とする『源氏物語』の精読、本居宣長に代表される国学の系譜に連なる人々による新たな読みの発見といった、知識人たちによる学問・研究がある一方、それ以外の新たな幅広い読者層が次第に生まれていきました。それには絵入りの梗概書の刊行などが大きく影響しており、広く江戸文化の中に浸透していきました。17世紀末から19世紀前半にかけて、江戸時代の文学、絵画、工芸をはじめとし、往来物の中にも取り上げられ、和服の意匠、和菓子や香道、遊戯具、遊里の文化と多岐にわたる『源氏物語』の影響を見出すことができます。絵双六もその中の一つです。

『源氏物語』に取材した絵双六には大きく分けると二系統があり、一つは『源氏物語』の巻名や巻名にちなんだ和歌、源氏香などが取り合わせて描かれているものです。本学所蔵のもののうち『源氏かるた絵合』<sup>26</sup>はこちらに該当します。もう一つは合巻『修紫田舎源氏』に取材したものです。本学所蔵のものはこちらが多く、『そのゆかり源氏寿古六』<sup>28</sup>、『其紫湖月雙六』<sup>29</sup>、『若紫由可理雙録』<sup>30</sup>が該当する絵双六です。

合巻は、江戸後期の庶民にとって最も親しい絵入り読み物でした。『修紫田舎源氏』は、『源氏物語』を下敷きにして舞台を室町時代の足利将軍家に置き変えた内容です。文政十二(1829)年から天保十三(1842)年の十四年間にわたり初編から三十八編まで刊行されました。作者は柳亭種彦、画者は歌川国貞でした。これは大変な人気を博しましたが、その理由の一つは、国貞が描く挿絵のすばらしさでした。時代設定は室町時代ではありますが、描かれる風俗は全て当代のもので、しかも読者が憧れるきらびやかな世界が描かれていたのです。

国貞の描いた『修紫田舎源氏』の挿絵は、合巻という作品のスタイルから独立し、別に錦絵としても作られるようになり、これがまた大きなブームを巻き起こし、江戸時代の終わりから明治の初めにかけてまで作られ続けました。これらの錦絵を『源氏絵』と呼んでいました。絵双六は、『修紫田舎源氏』からの直接的な影響を受けたものと思われますが、この『源氏絵』からも大きな影響を受けていると思われます。

本学所蔵の絵双六『そのゆかり源氏寿古六』<sup>28</sup>、『其紫湖月雙六』<sup>29</sup>、『若紫由可理雙録』<sup>30</sup>はいずれも『修紫田舎源氏』に取材していると考えられます。その作り方は少しずつ異なっています。『其紫湖月雙六』<sup>29</sup>の各コマの絵は『修紫田舎源氏』の挿絵をもととしたと思われますが、各コマのコマ名のところには『源氏物語』の巻名が示されています。『若紫由可理雙録』<sup>30</sup>は絵もコマ名も『修紫田舎源氏』から取つており、コマ名には『修紫田舎源氏』の登場人物名が入っています。ただし所々『源氏物語』の巻名が入つているところがあり、不徹底な印象を受けますが、制作上の都合によるものと思われます。

なお絵双六の形態として、さいじろを振つて出たコマの数だけ進むという遊び方の「廻り双六」と、出たコマの数が示している場所へ飛ぶという「飛び双六」がありますが、『修紫田舎源氏』に取材したものは飛び双六のものが多くなっています。

(東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 教授 黒石陽子)

近世庶民教育資料から見た  
双六・往来物を中心とした

源氏物語